

研究課題：コロナ禍における地域の記憶の継承に向けた実践的研究

-地域研究センター明石ハウスを拠点として-

本研究は地域研究センター明石グループが主体となり、これまで明石ハウスを中心に行ってきた活動を非接触形式で継続することを目的として、①ウェブサイトによる情報発信、②紙媒体のメディア発行による地域とのネットワークの維持、③明石を題材とした記憶表出及び演劇制作による地域との連携、という三つの活動を行った。以下、その成果を報告する。

①については、地域研究センターのウェブサイトをリニューアルした。多様な端末に対応し、ブログ形式で即時的に活動内容を発信できるよう工夫した上で、順次新しい情報を掲載している。あわせてYouTube上に「明石ハウスチャンネル」を開設し、過去の公開講座や新たに作成した「くずし字解読講座」の動画を公開している。

②については、『2021年度神戸学院大学地域研究センター 活動・研究報告書』を刊行した(2022年2月刊、全76頁)。これにはセンターのメンバーによる地域連携・地域研究関連の論考11篇が掲載されている。また一般向けに「明石ハウス通信」を刊行した(2022年2月刊、A4版リーフレット、全4頁)。同通信は明石ハウスの活動内容を分かりやすく発信することを目的としている。いずれも明石市内の個人、諸機関、県内の図書館等に寄贈を行い、コロナ以前から明石ハウスの活動に関わりを持ってきた方々とのネットワークの維持に役立っている。

③については、(1)演劇プロジェクト「アタシノアカシ」、(2)稲爪神社フィールドワーク写真展、(3)オンラインくずし字解読講座、(4)大蔵地区における都市近郊班の研究、を実施した。(1)は中山ゼミ生による演劇制作プロジェクトで、明石を題材にした脚本を学生が執筆し、3月28日に学内限定ではあるが上演会を行った。上演作品はいずれも明石を舞台とする『夕暮れの夏』『ある晩のこと』『明石の城には誰もが集まる』である。学生たちの感じた「明石」像を演劇作品として形にするとともに、インターネット上のアンケートを利用して観客の感想を募り、観客の持つ「明石」像をフィードバックすることで理解を深めた。感染状況の悪化により、地域住民の観覧ができなかったことは遺憾である。

(2)については、2022年1月から現在まで稲爪神社で展示を続けている。教員・学生が稲爪神社大祭など地域で撮影した写真を展示し、地域研究センターの活動を地元住民に知ってもらう機会となっている。同時にコロナ禍によって祭礼や芸の奉納が縮小しているなか、地域の記憶の継承としても同写真展は意味を持つ。

(3)については、研究推進費により明石ハウスで活動する地域担当者として中村真理氏(日本文学)を配置した。同氏は2019年度より、地域の方々を対象とした「くずし字解読講座」を実施し好評であったが、コロナ禍により活動中止に至ったため、2021年度はこれを非接触形式で再開した。すなわち「明石ハウス通信」にくずし字解読講座のコラムを執筆し、かつての講座参加者に郵送するとともに、くずし字解読の動画を作成し、YouTube上の明石ハウスチャンネルにアップロードした。教材には北村季吟の『源氏物語湖月抄』より「明石」の巻を用いている。

(4)については、大都市郊外地域における価値の再発見と持続のためのアクティブラーニング研究を実施した。同地域において矢嶋ゼミ生が地域の人々にオンラインで聞き取り調査を行い、暮らしの変化や震災記憶の伝承といった面から「地域の記憶」のあり方を探った。成果は近日中にまとめられる予定である。

以上の活動により、コロナ禍においても非接触的な方法により地域研究・地域連携がある程度可能であることを確認したことが、本研究の成果である。反省点としては以下の二点を挙げる。①非接触型による地域への情報発信はできたが、地域住民からの反応をフィードバックすることができなかった。双方向性の確保が課題である。②明石ハウスの地域連携活動として、最も好評を得てきた「大蔵谷ヒューマンサイエンスカフェ」が、コロナ禍以後、ほとんど再開できていない。何らかの形で再開・活動継続が必要だろう。